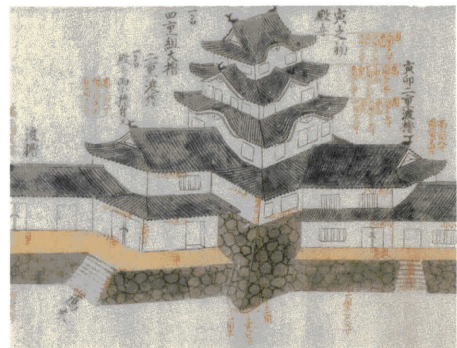


再建尼崎城について

平成 27 年 11 月、旧家電量販店の創業者である安保証氏あんほあきりから、創業の地である尼崎市において尼崎城を建築し、市に寄付するご意向が示され、尼崎城址公園内に建築することが決まりました。

尼崎城を再建するにあたり、江戸中期の「尼崎城分間（ぶんげん）絵図」などを基に、高さ約 24 メートルの四重天守と二重の付櫓を鉄筋コンクリート造りで再現しています。



尼崎城分間絵図（櫻井神社蔵、尼信会館寄託）

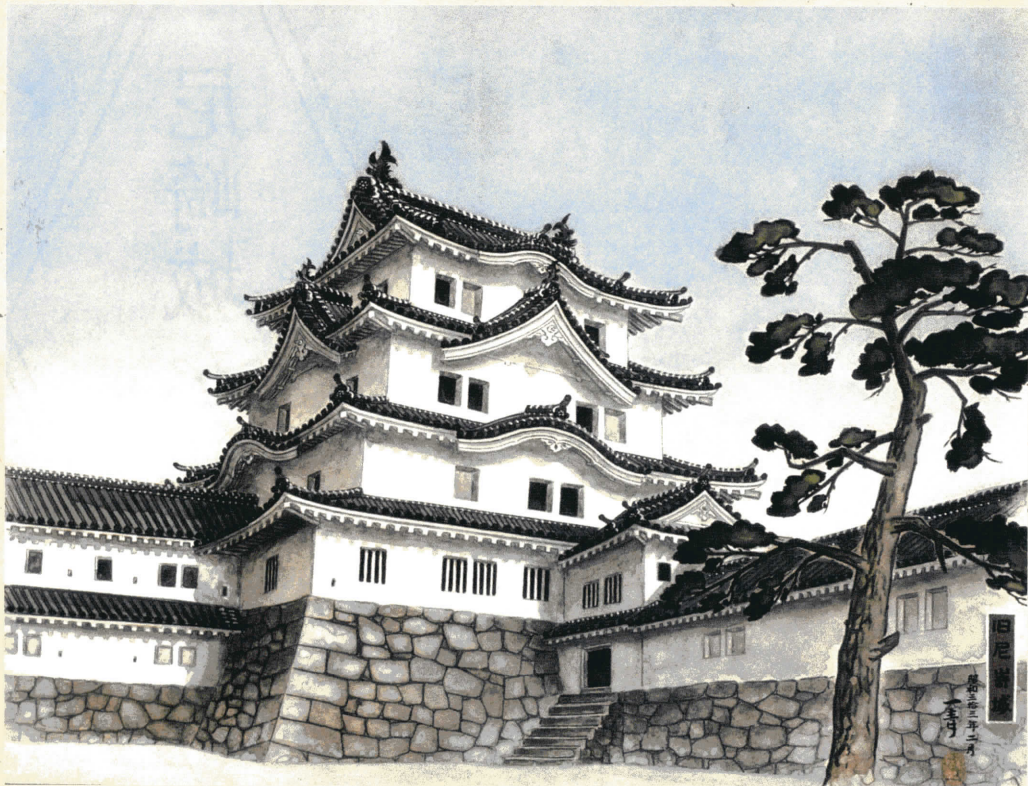
製作：尼崎市

発行年月日：平成 31 年 3 月

尼崎城を知る



幕府から重要視されていた尼崎城



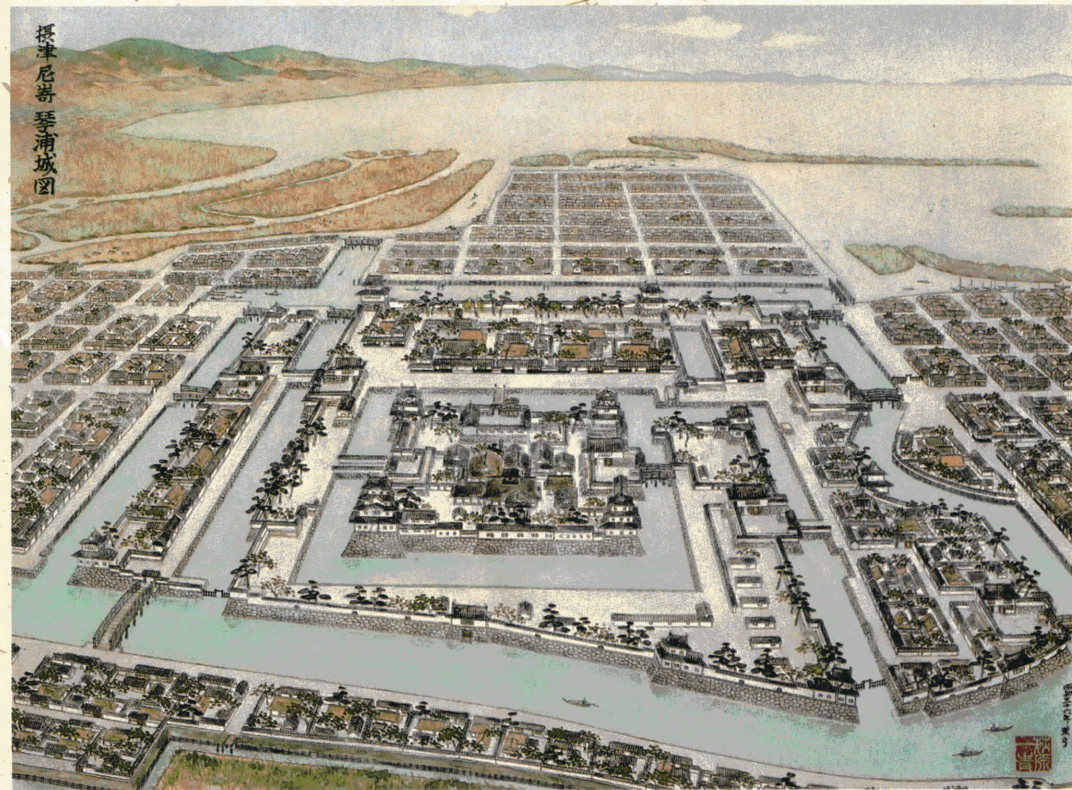
荻原一青画「旧尼崎城」

大坂夏の陣後、江戸幕府は大坂を直轄地として西国支配の拠点とするため、元和3（1617）年、譜代大名戸田氏鉄に尼崎城を築城させ、大坂の西の守りとしました。

尼崎城は、翌元和4（1618）年から現在の北城内・南城内の約300メートル四方に、甲子園球場の約3.5倍にも相当する、3重の堀、4層の天守を持つ広大な城として数年の歳月をかけて築造されました。

幕府は一国一城令により各地の城郭を破却する政策を推し進める一方で、尼崎には5万石の大名の居城としては大きすぎる城を敢えて造らせたことなどから、幕府がいかに尼崎を重要視していたかがうかがわれます。

また、築城工事と同時に城下町の整備も行われました。やがて、8つの町からなる尼崎城下町が完成し、多いときには2万人近い人々が暮らす阪神間唯一の城下町として栄えました。



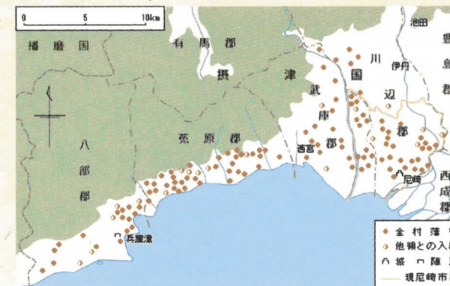
荻原一青画「摂津尼崎琴浦城図」

尼崎城は、戸田氏、青山氏、（櫻井）松平氏と代々譜代大名が藩主をつとめる尼崎藩政の中心として、また城下町尼崎のシンボルとして約250年もの間、威容を誇りました。その長い年月の間には修復工事を常に行い、城を保つ努力が繰り返し行われていたことがわかっています。各地の城の天守が倒壊、焼失する中、尼崎城天守が江戸時代を通して変わらぬ姿であり続けたことは奇跡的でもあります。

コラム

昔は神戸も尼崎だった…!?

尼崎藩は尼崎城を拠点とし、摂津国川辺郡・武庫郡・菟原郡・八部郡（現在の尼崎市・宝塚市・西宮市・芦屋市・神戸市南部・伊丹市の一部・川西市・猪名川町の南部）の主に沿岸部を領した藩で、西は現在の神戸市須磨区のあたりまでありました。

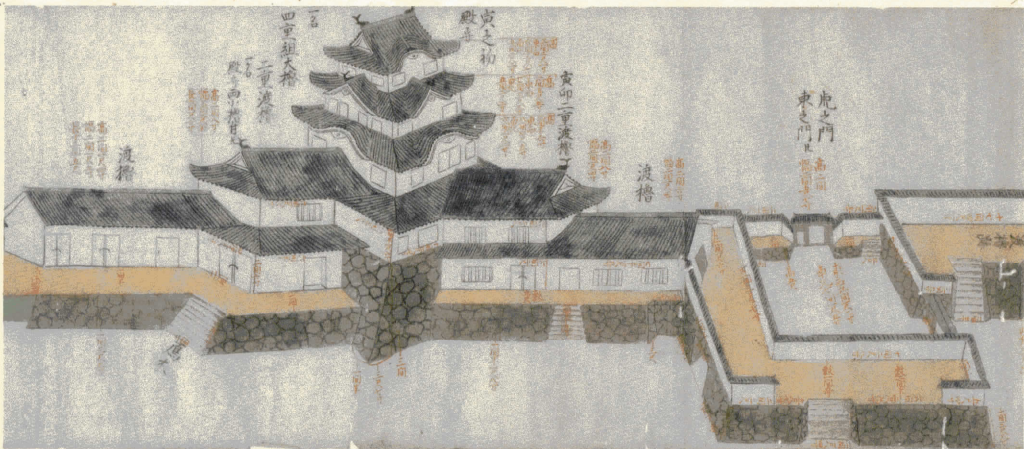


web版尼崎地域史事典「apedia」より戸田氏時代～青山氏時代初期の西摂尼崎藩領村々

縄張り～お城の設計について～

築城当時の尼崎城は、庄下川を西の外堀とする3重の堀と南を海で囲まれ、尼崎の地勢を活かして築城された、戦国時代以降によく見られるようになった平城です。

中世から湊町として発展していた尼崎町を城下町に取り込む一方、当時の幹線道路である中国街道上に築かれたことから、海上と陸上の両方の軍事に焦点を当てたお城といえます。



尼崎城分間絵図（櫻井神社蔵、尼信会館寄託）

城の縄張りは本丸・二の丸・三の丸を配し、二の丸はさらに本丸東側を松の丸、南側を南浜とに分けられていました。三の丸は東西に2つありました。本丸を中心にして、時計回りに二の丸、松の丸、南浜、西・東三の丸へと外側に広がる渦郭式と呼ばれる形式を持ち、最重要拠点である本丸へは容易に近づくことができない構造でした。さらに主要な門の内側には枡形と呼ばれる方形の空間を設けたり、天守と物見台である櫓台を含めると17ヶ所も構えるなど、外敵が城へ侵入しにくい仕組みが設けられており、行政機能を重視した平城でありながらも、軍事施設としての防御機能も備える工夫が凝らされていました。

本丸

本丸は城の中心に位置する約100m四方の郭で、北東隅に4層天守、他の3隅には3層の武具櫓・伏見櫓・塩噌櫓が配され、武器庫・食料庫などとして使用されたと考えられます。

本丸御殿は城主の住居であり、同時に藩の政務や重要な儀式を執り行う場所でもありました。御殿の北東部には身分の高い客人をもてなすための「牡丹之間」「菊之間」という専用の湯殿と茶室を備えた貴賓室が設けられており、両部屋の四方には金襖・金障子が用いられたことから「金之間」と呼ばれました。



「松平氏時代の尼崎城（尼崎市教育委員会作成）」

二の丸

二の丸御殿を始め、米を貯蔵する「御城米蔵」、米蔵を警備する「御城米番所」、馬を飼っておく「厩」が立ち並んでいました。

南浜

(櫻井)松平氏藩主時代には尼崎藩の家老5名の屋敷が並んでいたことから、五軒屋敷と呼ばれる家老屋敷がありました。

また、(櫻井)松平氏藩主時代には「作事小屋」「鍛冶蔵」「すき(土壁に混ぜる藁や草)蔵」「畳蔵」などがまとめられ、城内の建物や調度類の修繕を行うための道具や材料を保管する場所になりました。

松の丸

虎之門で本丸と繋がり、鉄砲や弓の練習をする「的場」、火薬を貯蔵する「煙硝蔵」などがありました。

西・東三の丸

主に南浜の重臣に次ぐクラスの家臣たちの屋敷などがありました。それ以外の家臣たちの屋敷は、城の周辺や城下西側に設けられた東屋敷・西屋敷の武家屋敷に配されました。

尼崎城天守について

尼崎城の天守は、4層4階の大天守に、西側の2階建て多聞櫓の小天守約12メートルの天守台石垣の上に約18メートルの高さでそびえ立つて装飾的な意匠が凝らされ、シンプルながらも堂々として美しい天守は本来戦争時の見張り台や籠城時の指令所として発展しましたが、城や天守喪失後に再建されない城が多くありました。尼崎城の天守も権力の象徴であると同時に、江戸時代の泰平の世を象徴するものでした。

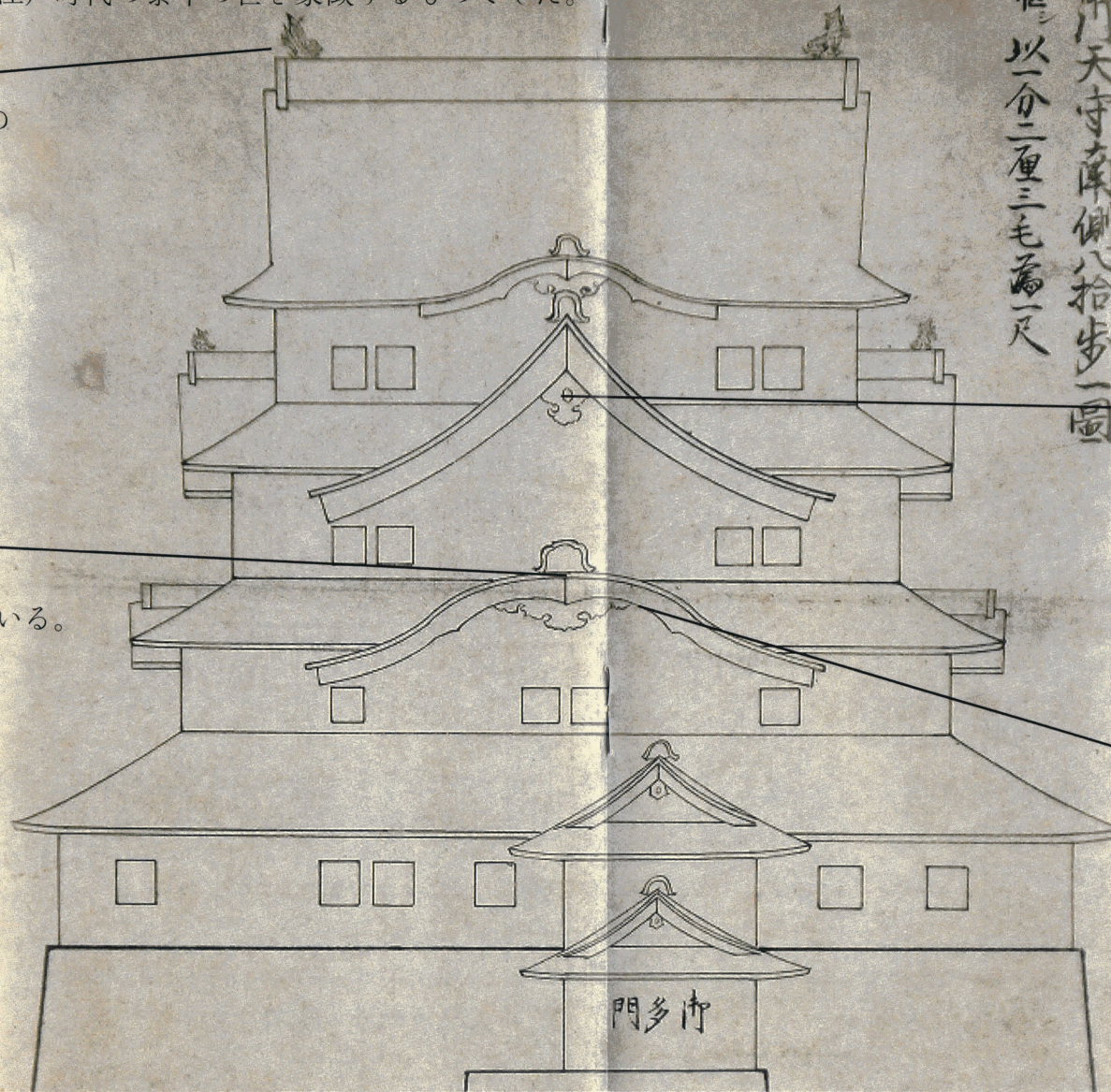
守が付属する複合式天守と呼ばれる形式でした。層塔式の大天守は、2階から4階まで唐破風、千鳥破風の屋根飾りを外観を持つ江戸時代の尼崎のシンボルでした。軍事的な性格が薄れた江戸時代においては、もともと天守を持たない非実用的なものでしたが、外観を意識した装飾的で美しい天守の姿は、

しゃち
鯨

火除けとして、屋根などの棟の両端に据えられている。

鬼瓦

屋根の棟の端に置く大きな瓦。守り神とされている。



但し以一分二厘三毛高二尺
天守南側八拾歩一圍

千鳥破風

屋根の流れ面に起こした三角形の破風のこと。

唐破風

反り曲がった曲線状の破風のこと。

姿を消してしまった尼崎城

明治6（1873）年、明治政府はこれまで陸軍省の所管であった全国の城郭を、軍用として残すもの以外を大蔵省に所管換えし、処分すべきものとししました。

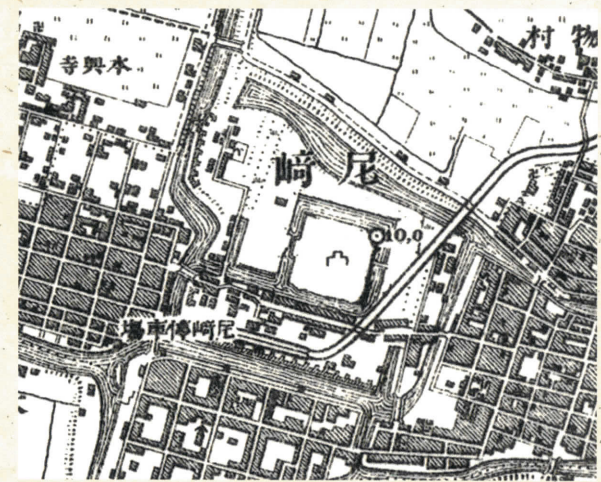
尼崎城は大蔵省所管とされ、廃城が決まると間もなく建物は取り壊され、翌年には民間に払い下げられて処分されました。こうして250年以上にわたって尼崎のシンボルとして威容を誇った尼崎城は姿を消してしまいました。

残った堀も次第に埋め立てられ、本丸石垣は尼崎港修築のために防波堤の石材として利用されました。城地も官公庁舎や学校用地などへと転用され、今では地名や一部残された部材などに名残りを残すのみとなりました。



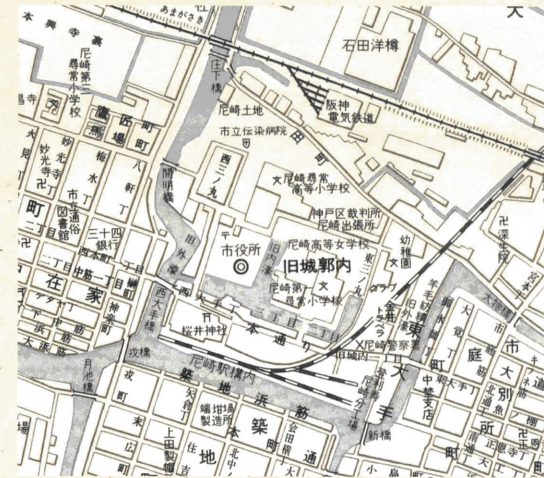
仮製二万分一地形図（1885（明治18）年測図）（部分）

旧城郭はまだ形をとどめていますが、西三ノ丸と二の丸の間の堀と、松の丸と東三の丸の間の堀の一部が埋められているのが分かります。（尼崎市教育委員会蔵）



仮製二万分一地形図（1899（明治31）年修正）（部分）

1891（明治24）年、尼崎 - 伊丹間に関西で最初の馬車鉄道である「川辺馬車鉄道」（後の阪鶴鉄道）が敷かれ、旧城郭内南側に尼崎停車場が置かれました。旧城郭内に尼崎停車場から大物停車場へ線路が斜めに通されています。（尼崎市教育委員会蔵）



尼崎市内および付近図（大正9（1920）年測図）（部分）

1916（大正5）年に尼崎町と立花村の一部が合併して尼崎市となり、1919（大正8）年に地図中の位置に新庁舎が建てられることが決まりました。

旧城郭の内堀の一部はまだ残っていますが、北側の堀は埋められ、本丸跡には尼崎第一尋常小学校や尼崎高等女学校が建てられています。（『尼崎市史』第3巻付図）

今も残る尼崎城の面影



尼崎城址の石碑

尼崎城本丸跡には尼崎市立明城小学校が建っており、その片隅に石碑が建っています。

尼崎城鬼瓦

櫻井信定公を祖とする、櫻井松平家が祀られている櫻井神社に保存されています。



庄下川

尼崎城の外堀でした。開明橋にかかる欄干には、尼崎城の縄張りや町割りがデザインされています。



尼崎城の主なできごと

尼崎城関係年表

年代	出来事
元和 3年(1617) 7・25	譜代大名戸田氏鉄(うじかね)が近江膳所ヶ崎より尼崎へ5万石の大名として所替えを命じられる
10・14	戸田氏鉄が尼崎へ入部 幕府から新城を築くよう命じられた。
12	本興寺開山堂・戒壇院などが寺町に移築 この年氏鉄の入部に従い、全昌寺・常楽寺・常隆寺等が膳所から尼崎へ移転
元和 4年(1618) 1~3	この頃、尼崎城築城着工か
元和 5年(1619) 9・8	將軍徳川秀忠尼崎城視察
元和 9年(1623) 夏	將軍徳川家光尼崎城を視察か
寛永12年(1635) 7・28	戸田氏鉄は10万石で大垣へ所替え、青山幸成(よしなり)が掛川から尼崎へ5万石の大名として所替え この年戸田氏所替えに伴い寺町の全昌寺・常楽寺・円通寺・常隆寺・南光院・般若院が大垣へ移転
寛永20年(1643) 6・7	青山幸利(よしとし)が尼崎藩主になる
寛文 2年(1662) 5・1	西日本一帯大地震 尼崎城天守が傾き、多門櫓・石垣などが破損
寛文 4年(1664) 6・19	幕府は尼崎城櫓・石垣などの改修を命ずる 南浜と西三の丸の隅櫓5棟を改める この年築地町建設完成
寛文 9年(1669) 5・1	出屋敷地割り始まる(5月中完了)
貞享元年(1684) 9・29	青山幸督(よしまさ)が尼崎藩主になる
宝永 4年(1707) 10・4	大地震のため尼崎城天守・櫓など破損
宝永 7年(1710) 10・16	青山幸秀(よしひで)が尼崎藩主になる
宝永 8年(1711) 2・11	青山幸秀は飯山へ所替え、松平忠喬(ただたか)が掛川から尼崎へ4万石の大名として所替え
享保元年(1716) 9・18	尼崎城の堀浚えを幕府に出願
享保16年(1731)~	出雲屋八兵衛・水堂屋嘉兵衛・姫路屋新兵衛などが堀浚えの人足を請け負う 享保19年(1734)
寛延 4年(1751) 3・20	松平忠名(ただあきら)が尼崎藩主になる
明和 4年(1767) 2・20	松平忠告(ただつぐ)が尼崎藩主になる
明和 5年(1768)	尼崎城下・兵庫津町の町民5,000人が堀浚え人足として従事
明和 9年(1772)	本丸に式台・御書院・御帳之間・御書間などあり
安永 6年(1777) 8	石垣孕みのため修築、西三の丸兵庫橋櫓建て直しを出願
安永 7年(1778) 12	石垣孕みのため修築、西三の丸兵庫橋櫓建て直しを出願
文化 3年(1806) 2・10	松平忠宝(ただとみ)が尼崎藩主になる
文化10年(1813) 4・14	松平忠誨(ただのり)が尼崎藩主になる
文化10年(1813) 7・9	貴布祢神社で櫓上棟祈祷(同10・10にも)
文政 8年(1825)	天守修復
文政12年(1829) 10・2	松平忠栄(ただなが)が尼崎藩主になる
弘化 3年(1846) 1・28	尼崎城本丸御殿出火焼失
弘化 4年(1847) 6・13	尼崎城本丸御殿再建、鎮殿祭
嘉永 7年(1854) 11・4	大地震のため尼崎城御殿・櫓破損
安政 2年(1855) 7・4	地震のため壊れた櫓・渡櫓・多聞・冠木門の修復を幕府に出願
文久元年(1861) 8・6	松平忠興(ただおき)が尼崎藩主になる
明治 6年(1873)	尼崎城の廃城が決まる

年表は尼崎市教育委員会発行「尼崎城の歴史」より転用



荻原一青デザイン・尼崎城手ぬぐい：尼崎市立地域研究史料館所蔵